

74 香水とお香 (2021年8月12日)

フランスにいと、香水を扱うお店や売られている香水の種類が多く、香水の本場の国にすることに気付かされます。日本において香水の歴史は長くありませんが、古代から香りの文化はありました。平安時代(794-1185)の貴族の女性は、お香を焚いて着物に香りに移しました。当時の女性は、御簾(みす)や几帳(きちょう)と呼ばれた木と布で作られた仕切りの奥から顔を出すことがほとんどありませんでしたので、仕切りの間からほのかに漂う香りによって、男性に対して自分の存在をアピールしました。また、男性と女性が直接言葉を交わすことはなく、和歌をしたためた手紙を送ることで、お互いの愛情を深めていきました。手紙にはお香の香り付けがされ、愛を育む男女の秘密の暗号のような役割も果たしました。室町時代(1336-1573)になると、香りを鑑賞することを芸術の域に高めた香道が誕生しました。



Encensoir/秋草蒔絵銀火屋付香爐  
Photo : Shiseido 写真提供 : 資生堂

日本人が香水と出会うのは、欧米諸国との本格的な交流を始めて西洋化を進めた明治時代(1868-1912)になってからです。明治政府が欧米各国を視察するために派遣した岩倉使節団(※)公式報告書である「米欧回覧実記」によると、使節団が1872年にパリを訪れた際に香水の製造場を視察したことが記されています。この記録の中では、香水の製造方法が詳しく書かれていることから、香水への関心の高さがうかがえます。しかし、ヨーロッパから輸入された香水は高価であったため、ごく一部の富裕層しか手が届かず、広く普及しませんでした。

20世紀になって日本でも香水作りが始まりましたが、ノウハウがない日本では商品化することは大きな困難が伴いました。パリで出会った香水に魅了された福原信三(日本の大手化粧品会社である資生堂の創業者)は、1916年から日本にある植物を使って日本人が好む香りの香水作りの研究を始め、1918年に発売された日本の女性雑誌に日本生まれの香水が紹介されました。画家で写真家でもあった福原は、植物の香りそのものから感じられる印象ではなく、植物が存在する風景を絵



FUKUHARA Shinzo.  
durant ses années d'études à l'étranger  
福原信三 留学時代(1910)  
Photo : Shiseido 写真提供 : 資生堂

## パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本



Parfum - Evening Primrose  
香水 - 月見草 (1919)  
Photo : Shiseido  
写真提供 : 資生堂

画のようにイメージして命名した香水を作りました。実は、お香に使われる香木にも、「春の風」や「白雲」と言った香木の香りとは直接関係ない名前が付けられているものがあり、これを「銘」と言います。銘には、名付けた人の香木を愛する思いが込められています。香水とお香の名前は、命名した人の感情や期待が表わされているという共通点があるのです。

フランスの香水と日本の香り（香水とお香）の名前にはどのような秘密が隠されているか、想像してみてください。はいかがでしょうか。

※岩倉使節団と米欧回覧実記については、<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100198643.pdf> を参照。